

牧野記念號を祝う

津村 重 舍

此の度牧野記念号の発刊に際し一言祝辭を述べさせていたゞきたいと思います。

想えば此の植物研究雑誌が、牧野先生の御指導により創刊されてから斯界の泰斗たる先生を始め寄稿家各位の並々ならぬ御努力に依つて本誌の聲價はいよいよ確固たるものとなり、植物愛好者や斯学の研究者に多大の貢献をなして來た事は私の心ひそかに誇りとするところであります。

本年はあだかも牧野先生が米壽を御迎えになられましたので、特に牧野記念号と致しまして愛読者と共に先生及び本誌に心からの御祝を述べたいと思います。

先生は最近御健康が勝れぬ由でありますか、分類学の世界的權威としての先生には世界の学界の爲にも未だ未だ御指導御活躍を願わねばならないのであります。

何卒先生にはくれぐれも御自愛下さいませ様衷心より御祈り申し上げます。

牧野記念号の発刊に際しまして、牧野先生の米壽を御祝ひ申し上げ、併せて先生の御健康を祈りつゝ本記念号の発刊に祝辭を述べさせていたゞく次第であります。

宮部金吾*: アイヌ植物名に就いて

Kingo MIYABE **: On some Ainu plant names.

アイヌ民族は、大古より極く近代に至るまで、其衣食住並に薬餌の資料の大部分を、山野に自生する草木類に求めていた。従つて、これらの植物の特性に精通し、又、其特性によつて夫々名前を附けていた。種類の多い属の植物、例へばスゲ、ヤナギの如き場合に於いても、其用途、産地、或は特性等に依つて、種類を識別して名前を附けてゐる。其観察力の鋭さには、実に驚嘆に堪へないものがある。

私の今日まで集めた、北海道及び樺太産の植物の中、アイヌ名の附いている種類は、五百八十余种の多きに達している。一種の植物でも、用途の廣いものには、部落や地方によつて多くの異名を持つているものが尠くない。こゝには次の十四項目に従つて、摘出したアイヌ名に、簡単な解説を加えることとする。

1. 日本名の轉訛したもの、又はアイヌ名が東北地方方言として殘つたと思はれるもの

ミツバを Michipa と言ふ。ノビルを Membiro 又は Mempiru と言ふ。シホデを

* 北海道大學農學部植物學教室。

** Botanical Institute, Faculty of Agriculture, University of Hokkaido, Sapporo, Japan.

Shuwonte と言ふ。アラミツを Minji 又は Minchi と言ふ。Minchi はバチエラー博士に依ると、魚肉の意であるから、魚肉と共に煮て食した草の意かと考へる。マタ、ビを Matatambu と言ふ。ツタウルシをウッシ又は Ushipungara と言ふ。ヤマウルシを Ushi-acha (ウルシの叔父), Ushi-ni 又 Ushi-chikuni (ウルシの木) とも言ふ。更科氏に依るとウッシはアイヌ語では、塗るといふ意がある。トチノキを Tochi-ni (脂の木) と言ふ。春新芽に脂が多量に分泌されるからである。トチノキの多く生じている谷の地名にトチナイといふ処が南部地方にあり、又それから出た姓名もある。

培養植物で近代移入されたものは、日本名そのままである。アヅキはアンヅキ、又はアンツキ。インゲンマメはマーメ。アブラナ、ナタネナは Atane 等である。古くから栽培されていたものは、純粹なアイヌ語と思はれる名前が與へられている。アハを Munchiro, と言ひ、ヒユを Biyaba, Piyapa と言ふ。オホムギを Menguro, Menkuro と言ふ。キビ、イナキビを Sipuskep (ふくれる即ちふえるものゝ意 (知里氏に依る)) と言ふ。スモ、の木を Momani. イネ、コメを Amam と言つていた。

2. 材及び樹皮の用途により命名された樹木名

ヤマクハを Teshimani と言ふ。Teshima は雪靴カンジキのことで、其枝を曲げてカンジキを作るからである。ハルニレ、アカダモの一名に、Chikisa-ni といふのがある。Chikisa とは、錐もみして発火せしめることを言ひ、アカダモの根には太い導管が多く、空気がよく通ふので、充分乾燥せしめた後、他の木片の上で錐もみして発熱した時、其上部から息を吸ひ込むと発火することから出た名である。カラフトカシハを Tunni (強い木、又は柱になる木) と言ふ。エゾノシラカバを Ki-tat (光沢ある樹皮をもつカバノキ), 又 Kapat-tat (滑らかな皮をもつカバノキ) と言ふ。サイハダカンバ、マカバを Ironne-tatni (厚い皮をもつカバノキ), 又其若木で櫻の木の皮に似てゐるものを Karimba-tat と言つている。ダケカンバ、ソウシカンバを Sarampe-tat と言ふ。これは柔かい衣服を装ふたカバノキの意である。サハシデを Paseni (重い木) と言ふ。ヤチダモを Pinni (男性の木) と言つてゐるが、これは眞直に喬木に成長するからである。サハグルミも或処では Pinni と言つている。ヤチダモの材は曲り易いので、樺太では Tappenni 又 Tawi と言ひ、たがに用いている。ハンドイを Pungau (柱の木) と言ふ。一般にアイヌはこれを堀立小屋の柱に用いた。地中にあつても、却々腐蝕しないからである。ミヅキを Utukanni (水を滴下する木) と言ふ。イタヤカヘデを Topeni (甘い液汁を出す木) と言ひ、カヘデ類の代表的なものとして考へられている。メイゲツカヘデを Retat-topeni (白色の材をもつカヘデ), 又 Iwa-topeni (山地若しくは岩山に生ずるカヘデ) と言ふ。ヤマモミデをも同じく Iwa-topeni と称している。エゾクロビイタヤ (牧野), ミヤベイタヤ (牧野) を Nitat-topeni (湿地に生ずるイタヤ), 又 Yaiwende-topeni (用途のないイタヤ) と言つている。オホヤマザクラ, エゾヤマザクラを Karimbani (巻きつける木) と言ふが、これは其樹皮を以て弓や矢筒を巻き、山刀又は小刀の鞘

を巻いて半ば実用的に、半ば装飾用に供していたからである。シウリザクラを Shiuri (甚だ貴いもの) と言ふのは、其材が頗る強く、且つ弾力があり、槍や矛の柄に適し、又昆布採集具の棹に用ひたからである。

マツ、モミの類には トママツ、エゾマツの如く重要な樹種が、北海道に大木の純林をなして、殆んど到るところに繁茂していたが、アイヌは其材を利用する途を知らなかつた。小屋の用材としては、小木の丸太を、垂木、梁等に使用したに過ぎなかつた。従つてアイヌ名も木材利用に関するものは無いやうである。トママツを北海道のアイヌは、Hup (腫物) と言ふが、これは樹皮に脂の瘤が多く生じているからであり、其脂をウソコツクと言い接着用に供した。エゾマツを Shunku 又は Shungu と言ふが、其意義は不明である。知里氏に依ると、樺太アイヌは其枝根を、メチロホと言い、物を綴ぢ、或は縛るに用いた。又夏季樹皮を剥いで、屋根や壁を葺くに用い、樹脂は矢の箭幹に、鍔(やじり)をつけるに使用した。アカエゾマツを Chikap-shungu (鳥のエゾマツ) と言ひ、用途のないエゾマツを意味してゐる。樺太では之を Arakoini (力附ける木) と言ふ。此木の葉が水腫病に特効があることによる。シコタンマツ、カラフトカラマツ、グイマツを Kui と言ふが、Kui とは黒いといふことで、樹皮が黒いから、冬期落葉した純林が眞黒に見えることによるものと考へられる(バチエラー博士による)。ゴエフマツを Chikap-hup (鳥のトママツ) と言ひ、利用の途がないからである。ハヒマツを Todonup (多量に樹脂を滲出するもの)、Henekkere (曲りくねつた莖をもつ)、又 Hepitapni (わなにかける木) 等の名がある。よく此木の特性を現している。

エゾヤナギ、カハラヤナギを Susu (皮を剥ぐ) と言ひ、ヤナギの代表的樹種とされ、材が白色で、最も普通にイナウに作る。又 Shiu-susu とも言ふ。これは苦い皮をもつヤナギの意である。ナガバヤナギを Yayai-susu (普通のヤナギ) と言ひ、材が白色でイナウに作る。これは又 Shiu-susu ともいはれる。エゾノキヌヤナギを同じく Yayai-susu と言ひ、イナウを作る。又川側に生ずる故に Pet-susu とも言ふ。マルバノバツコヤナギは、大木になり丸木舟を作るに用ひるから、Chip-ni-susu と言ふ。エゾノバツコヤナギは、樹皮から縄を作る故、Tushni, Tush-koroni (縄をもつ木)、又 Susu-at-ni (繊維のある皮をもつ木) 等の名がある。イヌコリヤナギには Ura-susu (枝編み細工に用いる柳)、Urai-susu (魚の罟を作るヤナギ)、又 Shi-tush-koroni (繊維に富む木) 等の名がある。トカチヤナギを Toi-susu (非常に大きなヤナギ)、又 Chishini (悲しみの木、墓標に用いられる故) と言ふ。クシヤウヤナギは Rambara (非常な大木となる木) と言ふ。ハコヤナギは Nup-Kurunni (高原に生ずるハコヤナギ)。ドロノキを Pet-ron-Kurunni (川淵に生ずるハコヤナギ) と言ふ。

3. 弓矢を作る植物

イチキ、オンコを Rarama-ni (弓を作る木)、又 Kune-ni (弓にする木) と言ふ。ハヒイヌガヤを Kanat-ni, Anat-ni (アマツボの弓を作る木) と言ふ。ツリバナ、エリマキ

を Kongeni (弓を作る木)、又クニツ (手弓を作る木) と言ふ。ヲギを Ki (矢の軸にするヨシ)、又 Shiki (大きなヨシ) と言ふ。キタヨシを Shupki (固い莖をもつヨシ)、又 Supki (矢軸を作るヨシ) と言ふ。エゾネマガリダケを Rumne-top (鐵、矢の先を作るサ)、Aiush-top (矢を作るサ)、又 Opne-top (槍を作るサ) と言ふ。ネムロブシダマ、エゾヘウタンボク、並にベニバナノヘウタンボクは、皆 Ainani (箭幹を作る木) と言つている。ムシカリも又 Ainani と言ふ。ハヒイヌツゲは Aikeshupni (箭幹の木) と言ふ。

4. 燃え易く焚木とする樹木

サンザシの種類は皆燃え易い。エゾサンザシ、クロミノサンザシを Unchini (焚き木) と言ひ、エゾオホサンザシを Abeni (焚き木) と言ふ。アカサンザシを Unseni, Unchuni (焚き木) と言ふ。ハシドイを Pushni (はねて能く燃える木) と言ひ、ナ、カマドを鉋路の屈斜路アイヌは Abeni (火の木) と言つている。

5. 繊維をとる植物

オホバイラクサ、エゾイラクサを Mose, Muse (繊維をとる草)、Ikara-hai (縫い物をする糸)、Iririp (人を刺戟するもの)、又 Ipishiship (刺戟するもの) 等の名がある。ムカゴイラクサを Kapai (繊維を有するもの) と言ふ。オヒヨウダモを At-ni (糸を生ずる木)、Niikap (繊維のある樹皮)、Arushini (衣服を作る木) 等と言ふ。シナノキを Nibeshini (樹皮に繊維を有する木)、Kukere-Kepni (弓を巻くに用いる繊維ある皮をもつ木) の名がある。ツルウメモドキは Haipungara (繊維を有する蔓) と言ふ。エゾナニワツ (牧野) を Ketuhashi (繊維をもつ灌木、皮を剥ぐ灌木) と言ふ。カラスシキミ *Daphne Miyabeana* Makino をも Ketuhashi と呼んでいる。エゾヒナノウスツボを Katuwa (繊維をもつ) と呼ぶ。ヤナギランを樺太ではキナボアヘニと言ひ、其皮にある繊維を漂して、白色にしたものを、種々の色に染めキナ蓆を造るに用いる (知里氏に依る)。

6. 薬効ある植物

ツリフネサウを Okuima-kina (利尿に効ある草) と言ふ。ノブキを Oinamat (昔から珍重されている草) と言ひ、漆瘡の特効薬として珍重されている。ヤマシヤクヤクを Horap (下剤) と言ふ。カラマツサウを Arikko (興奮剤)、又 Kioro-kushi-kina (精力を興へる草) と言ふ。キジカクシを Topishiki-mun (瘡の薬草) と言ふ。ナギナダカウジュを Seta-endo (犬のエゾミソハギ) と言ひ、二日酔の特効薬として用ひる。シャウブを Surugu-Kusuri (解毒剤、万病薬) と称する。ハヘドクサウを Pirikaru-Kina (傷を癒す草) と言ふ。エゾリンダウを Nutekkara-kina (耳の遠いのを治す草) と言ふ。ミヤマリンダウを Kiyoshutu、又は Kioshut (足を強くする力のある草) と言ふ。エゾオホバセンキウを Moshui-Kina (少しく苦い草)、Yakara-Kina (破裂する草)、又 Pauchi-kina (毒を盛つてある草) 等の名で呼び、根を胸痛及び腹痛に、又祛痰薬として

用ひ最も効ありとしている。ハマイブキバウフウを Upeu (熱湯に浸す) と言ひ、其根を殆んど万病に効く薬として珍重している。イヌエンジュを Chikubeni (獸に咬まれた時に用いる木) と言ふ。

7. 有毒植物

オホエゾブシを Surugu (有毒のブシ)、又 Kerep-noye-Surugu (單にひっかいただけで中毒する程烈しい有毒のブシ) と言ひ、北海道に産するブシ 類の中最も劇烈な種類である。テシマトリカブトを Shonno-suruku (眞のブシ) と言ひ、有毒な種類である。カラフトブシ、ホソバトリカブトを同じく Shonno-suruku、又 Yayan-suruku (普通の劇しい毒のあるブシ) と言ふ。ヒロハノカラフトブシを Setashuruku (犬のブシ) と言ふ。無効のブシの意である。エゾトリカブトを Kina-surugu (毒のないブシ) と言ふ。ドクウツギを Parakan (辛辣で猛烈な毒性を有する) と言ふ。ツルシキミ、キタミヤマシキミを Aiush-kina (嘔吐を起す草)、Arikare-ni (嘔気を催す木) と言ふ。キンギンボク、ブシダマを Epot-pochi (下痢、嘔吐を起す笑) と言ふ。

8. 香の高い植物

エゾノウハミヅザクラを Kikinni (防禦に用いる木) と言ふ。これはアイヌが香の高い植物を疫病神が嫌ふと信じ、飲料水の中に入れたり、又家屋の戸口などに刺して置いたものである。ギヤウジヤニシクを Pukusa (悪臭)、又 Hurarui-kina (強烈な臭のある草) と言ふ。カリガネサウを Hurarui-mun (強い臭をもつ草)、又 Hurawen-kina (悪臭をもつ草) と言ふ。メノコは之を枕の中に入れて、疫病神の來るのを防ぐといふ。イヌエンジュを Chikubeni (獸に咬まれた時に用いる木) と言ひ、其材に強い香がある故、イナウを作り疫鬼を驅逐するに用ひた。

9. 肛門並に放屁に關するもの

クサノワウを Otompui-Kina (肛門の草) と言ふ。これは莖や葉を切ると、切口から黄汁が滲出するからである。キジムシロを釧路のアイヌは Otompui (肛門) と言つてゐる。これは黄色の花が苗の中央に集つて咲いている故である。キダコブシ、ヒキザクラを Omaukush-ni (香氣を伝達する木) 又 Opkeni (放屁の木) と言ふ。アイヌがコブシの如き良香を有する樹に、放屁の木と名附けた理由は明かでない。トチバニンジンのことをナンカイと呼ぶことが、古書に見られるがバチエラー博士によると、恐らく放屁を促すの意であらうといふ。

10. ひつかゝる草

イシミカハを Ungere-kina (施與する草) と言ふ。蔓に曲刺があつて、衣服などにかからみつく故に贈り物をするといふ意味である。Ungerekina の名は、他の植物にもあり、ミゾソバ、マ、コノシリヌグヒ、メナモミ等はその例である。ミゾソバの一名をイラブンガラ (いたづらな蔓) と言ふ。ゴボウを Seta-koro-koni (犬のフキ) と呼んでいるが、其實を Raita (ひつかゝる) と言ふ。ダイコンサウを Pon-raita (小さなゴボウの実)

又 Seta-raita (犬の raita) と言ふ。キンミツヒキを Raita-mun (ひつかゝる草), 又 Kina-raita (草の raita) と言ふ。ヤブタバコを Ainu-kina (曲毛のある実をもつ草), 又 Ikere-kina (掻く草) と言ふ。

11. 長い地下莖をもつ植物

ヲシヨロサウ, *Apocynum Basikurumon* Hara を Paskuru-mun (長い地下莖を出す草) と言ふ。これは驚くべき長い地下莖を以てはびこる草である。ハマニシク, テンキグサを Muri (長く匍匐する地下莖をもつ草), 又 Tokoki (匍匐する足跡をもつ草) と言ふ。

12. 破裂して種子を飛散せしめる植物

キツリフネに, ホペヌキナ (びつくり草), カツコブシ (破裂する莢), ニキニキナ (さはると破裂する実をもつ草) 等の名をつけてゐる。イガホ、ヅキを Ipot-pochi-kina (飛び出す草) と呼んでいる。

13. 地衣並に菌類

カブトゴケを Nikompo (木上に生ずる昆布), 又 Nikepuru (薄片に分離する木の皮) と言ふ。サルヲガセ及びミヤマサルヲガセを Nireki (木のおごひげ), 又 Chikuni-nirek (同上) と言ふ。ハナゴケ, シラゴケを Shin-rush (地上に生ずる地衣) と言ふ。キツネノチャブクロを Shupu-yanup (煙を出す菌) と言ふ。ホクテタケ, ツリガネタケを Abe-op-karush (火を保つ木耳, 火菌, ほくち), 又 Pasne-karush (ほくち木耳) と言ふ。エブリコを Shiu-karush (苦い木耳) 又 Kui-karush (グイマツの木耳) と言ふ。

14. 偕老同穴の草

カラハナサウを Kosa と言ふ。Kosa とはバチエラー博士に依ると, “共に年取り, 共に死ぬ” と言ふ意義がある。これは此草は葉と実とが同時に凋み, 同時に落下するからであらう。

アイヌ植物名の意義に就いては, 故 John Batchelor 博士に負ふ処が頗る多い。茲に謹んで深甚なる謝意と敬慕の誠を捧げる。又北海道大学法文学部講師 知里文学士の懇切なる修正を忝ふしたことを深謝する。